

村上春樹著「遠い太鼓」講談社 1990年6月25日刊を読む(2)

走ること

1. 小説の第一稿は3月7日に完成した。3月7日は冷え込んだ土曜日だった。ローマ人は3月のことを気違いの月と言う。天候の変化や温度の変化がでたらめで急激なのである。前日はぼかぼかと春のようだったのに、一晩でまた真冬に逆戻りというところだ。この日は朝の5時半に起きて、庭を軽く走り、それから休みなしに17時間書き続けた。真夜中前に小説は完成した。日記を見るとさすがに疲れていたようで、ひとこと「すごく良い」と書いてあるだけだ。
2. 講談社の出版部の木下陽子さんに電話をかけて、小説がいちおう完成したことを連絡すると、4月の初めにポローニャで絵本の見本市があって、講談社の国際室の人が行くので、そこで原稿を直接手渡してもらえるとありがたいのだがということであった。なかなか面白い小説になったと思うよ、と僕が言うと、「えー、900枚もあるの？本当に白いんですか？」と疑わしそうに言う。けっこう猜疑心の強い人なのである。
3. すぐに翌日から第二稿にとりかかる。ノートやらレターペーパーに書いた原稿を、あたまから全部あらためて書きなおしていくのだ。400字詰めにして900枚ぶんの原稿をボールペンですっきり書きなおすというのは、自慢するわけではないけれど、体力がないととてもできない作業である。第二稿が完成したのが3月26日だった。ポローニャのブックフェアまでに仕上げなくてはと思ってものすごく急いでやったので、最後の頃には右腕が痺れてほとんど動かなくなってしまった。僕はありがたいことに肩がこらない体質だから、肩の方は大丈夫なのだけれど、腕がやられた。だから暇があると床でせっせと腕立て伏せをやっていた。長編小説を書くというのは、世間一般の人が思っているよりはずっと激しい肉体労働なのである。今ではワードプロセッサ導入のおかげでずいぶん楽になったけれど。
4. それからまた休む暇もなくその第二稿にもう一度細かい赤を入れる作業に移る。結局すっかり完成して『ノルウェイの森』というタイトルがついたのは、ポローニャに行く2日前のことだった。
5. この<ヴィラ・トレコリ>で小説を書いている期間、僕は小説以外には文章というものを一切書かなかった。手紙を書く気力もなかったし、日記さえろくに書けなかった。次の文章はその時期のことを、少しあとで、ある文芸誌に載せるために書いたものである。これはエッセイというよりは、むしろ独白に近いかもしれない。

P209 ~ 210

[コメント]

名作「ノルウェイの森」を書き上げたときの作家としての仕事ぶりがよくわかる。気力と体力、使命感がやはり小説家にも求められるようだ。

- 2012年3月28日 林 明夫記 -